

C04

あいちサイエンスフェスティバル
Aichi Science Festival
～科学祭という科学コミュニケーション～
Science Communication in a science festival

○山中敦子^A, 藤吉隆雄^B, 川上昭吾^A

YAMANAKA atsuko, FUJIYOSHI takao, KAWAKAMI shogo

蒲郡市生命の海科学館^A, 名古屋大学産学官連携推進本部^B

【キーワード】 科学系博物館, 科学コミュニケーション, 地域科学祭

1. はじめに

あいちサイエンスフェスティバル(以下、ASF)は、「JST ネットワーク形成地域型」の支援を受け、2011年からスタートした地域科学祭である。「ひろく愛知県内で、サイエンスへの興味と関心を喚起し、人々の交流と議論の場を生み出す」ことを目的として、国立大学法人名古屋大学が主催し、県内23機関(平成25年9月現在)による「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」の連携活動として実施されている。10月を丸ごと含む5週間を会期とし、会期中は愛知県のどこかで毎日サイエンスイベントが開催されているほか、フェスティバルの前後もプレ期間及びポスト期間として、年間活動を展開している。昨年度(平成24年度)においては、企画参加団体数30、登録サイエンスイベント数136、来場者数68,616名にのぼるフェスティバルとなった。

蒲郡市生命の海科学館は、初年度から「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワーク」に参加し、連携活動を行ってきた。科学祭における連携活動が科学館の教育普及活動にもたらした効果について検証を行う。

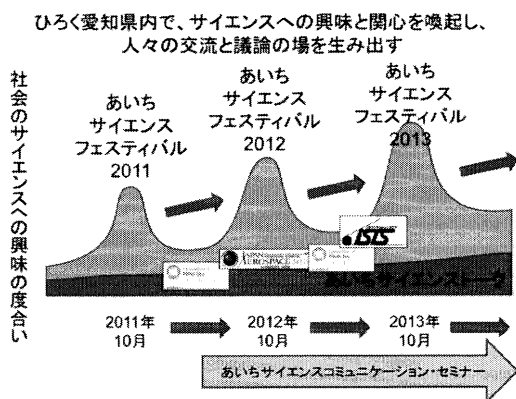


図1) ASFにより期待される効果

2. 方法

生命の海科学館において、ASF期間を含む1年半にわたり、児童および親子を対象とした実験・体験教室(「ワークショップ」と呼称)の参加者を対象にアンケート調査を行った。また生命の海科学館で実施したASF参加企画の参加者を対象にアンケート調査を行い、平常のワークショップ参加者との比較を行った。

3. 結果および考察

平常のワークショップにおいて、先端科学に関連したタイトルのワークショップについては、相対的にリピーターが多く新規参加は少ない(15%/全体23%)が、市外からの参加者が多く(61%/全体43%)、次回参加してみたいワークショップについてもバリエーションが大きい。一方、ASF参加企画として実施した先端科学に関する普及活動においては、相対的に新規参加が多い(40%)。総合的には、科学祭において科学館に新規の参加者を誘致しその後他の分野の講座への参加の促進に貢献していると考えられる。詳細については発表にて述べる。

4. 文献

- 1 「生命の海科学館」の活動を通じた社会連携活動の在り方の開発研究 III, 山中 敦子, 浅井 猛, 川上 昭吾, 日本理科教育学会東海支部大会研究発表要旨集 56 66-66 2010年11月
- 2 「生命の海科学館」の活動を通じた社会連携活動の在り方の開発研究 II; 山中 敦子, 浅井 猛, 川上 昭吾, 日本科学教育学会年会論文集 34, 269-270 2010年9月
- 3 「生命の海科学館」の活動を通じた社会連携活動の在り方の開発研究 I, 川上 昭吾, 山中 敦子, 浅井 猛, 日本理科教育学会全国大会要項, 60 232-232 2010年7月